

論文の内容の要旨

論文題目「ブルガリア前期青銅器時代土器の編年と地域間交流：デャドヴォ遺跡の資料分析を中心として」

学位申請者 千本 真生

キーワード：前期青銅器時代 ブルガリア デャドヴォ遺跡 土器編年 地域間交流

本論文は南東ヨーロッパの先史時代、とくに前4千年紀後葉から前3前年紀末の前期青銅器時代ブルガリアに起きた文化変化を、土器の変遷から読み解くための基礎研究である。第1の目的はブルガリア前期青銅器時代土器編年の再検討である。第2の目的は新たな編年的枠組に沿って土器からブルガリア各地域間および周辺地域間との交流関係を復元することで、ブルガリア前期青銅器時代の特質を明らかにし、その歴史的位置付けを試みることである。

第1章では本論の目的とブルガリア前期青銅器時代研究の背景について述べ、第2章ではこれまでの研究史を整理し、問題の所在と方法を提示した。これまでの研究ではブルガリア南部、上トラキア平野の標準遺跡エゼロ資料そのものが批判的に検証されてこなかった。また近年の緊急調査によって資料は増加しているものの、地域や時期を限定した研究が多く、ブルガリア全域の通時的な議論がほとんど行われてこなかったため、前期青銅器時代開始期から終焉にいたる物質文化の歴史的位置付けに関する評価が進められてこなかった。

こうした背景のもと、第3章から第5章ではブルガリア前期青銅器時代における土器の編年研究を行った。デャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡は層位資料がもっとも充実していることから、この2遺跡を編年研究の軸として分析を行った。第3章ではデャドヴォ遺跡の文化層を16層に分層し、器形と装飾をもとに分類した土器属性の層位分布を明らかにした。属性のなかから層位的にまとまる土器要素を時期区分に有意な指標として抽出し、5つの段階に区分した。この区分はとくに縄目文の出現から、小鉢・浅鉢・深鉢への施文変遷、そして縄目文の消失によって特徴付けられた。AMS法により第1段階の下限は前3200/3100年に、第5段階の下限は前2500年ごろに求められた。

第4章ではまず標準遺跡であるエゼロ資料の問題点を指摘したうえでデャドヴォ資料と相互比較し、上トラキア平野東部における年代的な指標資料の提示を試みた。その結果、エゼロ資料中に、デャドヴォ遺跡で認められた指標資料の変遷とおおむね同様の変動をし

めず指標を見いだすことができた。結果的にデャドヴォ・エゼロ資料をもとに上トラキア平野東部の前期青銅器時代を3時期(I~III期)に大別、6段階(各時期2段階ずつ細別)に細別することができた。

第5章では第4章の指標資料をもとに、ブルガリア各地に分布する遺跡資料の年代的位置付けを土器と層位の交差年代法により把握し、土器の地域性の解明を試みた。その結果、トラキア平野東部、平野西部、黒海西岸域、ブルガリア西部・南西部、ブルガリア北東部、北部、北西部の遺跡資料は、それぞれエゼロI期からIII期におおむね年代づけられることがわかった。また各地域では前期青銅器時代を通じて周辺地域の土器要素と関係を持ちながら、独自の土器群を形成、展開させてきた様子を見ることができた。

第6章ではエゼロI期土器の成立過程について論じた。エゼロI期土器の系統関係は、移行期のブルガリア各地において遺跡が稀薄であったことから、その周辺に展開していた土器群に求められることが予想された。エゼロI期土器の装飾と葬送儀礼に用いられた土器を比較した結果、凹線文と刻目凸帯文がドナウ川下流域のチェルナヴォダIII文化と、孔列文と微細刺突による文様および副葬品としての水差し利用が黒海北西岸域のウサトヴォ文化との系統関係を示し、両文化の土器要素が共存する形でエゼロI期土器が成りたったことを指摘した。これらの土器要素のうち、微細刺突文はウサトヴォ系文様を模倣したものであることから、エゼロI期土器の成立過程は集団の移動と情報の伝播が混在した形で進んでいったと想定された。北方からの文化的な影響はエゼロI期土器成立後も縄目文という形で認められたことから、上トラキア平野と黒海北西岸地域との関連性は一定期間のあいだ続いていたと考えた。

第7章ではエゼロI期土器成立後、前期青銅器時代に土器がどのように生産されていたのか、という点を明らかにするためにデャドヴォ遺跡資料を対象に、岩石学および化学的手法をもちいた胎土分析を実施し、土器原料の産地推定を行った。その結果、9割近くの土器が遺跡から東へ5km離れた丘陵地の花崗岩質岩を含むI類胎土に分類された。この結果は土器の原料と集落までの距離のデータを集成した民族誌とよく対応していた。したがってデャドヴォ遺跡ではI類胎土の土器を中心とした在地での家内生産的な土器作りが行われたと考えた。

第8章ではデャドヴォ遺跡から出土した縄目文土器を分析の主眼において、縄目文の上トラキア平野東部への出現および展開過程とその歴史の変遷について考察した。外来系の縄目文小鉢が最初に現れたのは、筆者の編年体系でいう上トラキア平野東部のエゼロIb期である。R撚り細縄の小鉢が出現したあとに、エゼロIIa期とIIIb期にはL撚り太縄の内弯浅鉢と深鉢が現れ、エゼロIII期には衰退、消失するという変遷を示した。上トラキア平野西部と黒海西岸域の縄目文土器はエゼロII期に現れ、それぞれL撚り主体の縄目文

とR撚り主体の曲線文系の縄目文が認められたことから、いずれも上トラキア平野東部の縄目文とは異なる地域性を呈していた。そして周辺地域資料との比較の結果、上トラキア平野東部の縄目文土器は黒海北西岸域のウサトヴォ文化に由来し、縄目文施文法が上トラキア平野へ伝播したことを確認した。伝播の過程を把握するために胎土分析を実施した結果、つぎのような変遷を描くことができた。上トラキア平野への縄目文の伝播→小鉢の製作→上トラキア平野北東部へ拡散→縄目文土器の在地生産の開始→縄目文土器の衰退・消失、である。

第9章では第3章から8章で論じてきた内容をふまえて、前期青銅器時代における地域間交流から上トラキア平野の特質について論じた。上トラキア平野では前期青銅器時代前葉におもに北方のドナウ川下流域および黒海北西岸域から、集団の移住をともなう形で文化的な影響を受けて土器文化が成立した。前期青銅器時代中葉になると、北方系要素が在地土器伝統のなかで融合し、独自に発展した。そして前期青銅器時代後葉には、北方系要素が消失し、カップ類の出現に代表されるように土器内容は大きく変化した。こうした背景としてロクロ製の搬入土器の存在が示すように、南方のアナトリア・エーゲ海域から都市的経済の影響が上トラキア平野に及び、平野の在地集団が南方由来の新しい経済による交流関係のなかに組みこまれていったと思われる。このことから前期青銅器時代の上トラキア平野はとりわけ南北地域との交流関係とその変遷のなかにこそ、歴史的特質をみることができると考えた。